

Title	再帰代名詞の分布に関する一考察
Author(s)	轟, 里香
Citation	Osaka Literary Review. 32 P.92-P.101
Issue Date	1993-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25495
DOI	10.18910/25495
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

再帰代名詞の分布に関する一考察

轟 里香

1. 序

英語の再帰代名詞の分布に関しては、統語論において束縛原理による厳密な規定が行われている。束縛原理は再帰代名詞を含む文の多くを説明するが、これに従わないように見える例もまた少なくない。後者の場合においては、意味的な要因が深く関わっているように思われる。事実、これまで様々な意味的・機能的説明が試みられてきた。Kuno (1987) はその代表的なものである。彼は、多くの意味的制約を設けることによって、統語論では扱えない例を説明している。しかしその試みは、成功している部分もあるが、意味的制約間の統一に欠け、問題があるように思われる。

小論では、再帰代名詞の分布を意味的な観点から分析し、束縛原理に従わない例を統一的に説明できかつ束縛原理に従う例にも当てはまる意味的制約の提案をめざす。

最初に、形式的・統語的説明のみでは扱えない例があることを指摘し、それらの間の共通点を探る。次に、Kuno (1987) が提案している意味的制約を挙げ、その問題点を考える。そして、再帰代名詞の分布全体を特徴づけている、より簡潔で統一的な意味的制約の提案を試みたいと思う。¹⁾

2. 束縛原理の例外

Chomsky (1986) の束縛理論において、音形を持つ NP は三つのグループ—照応形、代名詞、指示表現—に分けられている。再帰代名詞は、このうちの照応形のグループに含まれる。すなわち、その分布は、次に挙げる束縛原理の A によって規定されることになる。

(1) 束縛原理

- (A) 照応形は、ある局所的領域の中で束縛されていなければならない。
- (B) 代名詞は、ある局所的領域の中で自由でなければならない。
- (C) 指示表現は、自由でなければならない。

(1) における「ある局所的領域」とは、Chomsky によれば、完全機能複合 (CFC) をなす最小統率範疇である。すなわち、その範疇の主要部の特性と合致するすべての文法機能 (具体的には、主語と補部) が具体化されている最小の範疇である。この定義によれば、束縛原理における局所的領域とは、ほとんどの場合、S か、主語を持つ NP ということになる。また、「束縛される」とは、Chomsky (1981) によれば、同一指標を持つ先行詞によって c 統御されるということであり、束縛されていなければ「自由である」ということになる。

以上の定義から、再帰代名詞に関する束縛原理の要求は、「①同一指標を持つ先行詞により、②最小統率範疇の中で、③c 統御されること」であるといえることができる。また、代名詞形との関連においては、「④相補分布をなすこと」が要求される。これらは、次のような例によって示される。

- (2) a. Mary_i hates herself_i.
- b. *Mary hates himself.
- (3) a. John thinks that Mary_i hates herself_i.
- b. *John_i thinks that Mary hates himself_i.
- (4) a. John_i hates himself_i.
- b. *John_i's father hates himself_i.
- (5) a. Tom_i thinks John admires him_i.
- b. Tom thinks John_i admires himself_i.

(中村、他 1989)

- c. *Tom_i thinks John admires himself_i.
- d. *Tom thinks John_i admires him_i.

(2b) は同一指標を持つ先行詞がないので容認されない。(3) においては補

文のSが最小統率範疇であり、(3b)はその中で再帰代名詞が束縛されていないので非文となる。(4b)はc統御条件を破っているので非文法的である。(5a)–(5d)は、再帰代名詞と代名詞が相補分布の関係にあることを示している。

このように、束縛原理は多くの例に関し正しい予測を行うが、これに従わないように見える文がある。

- (6) Between *ourselves*, Watson, it's a sporting duel between this fellow Milverton and me. (cf. (2b))

(Conan Doyle 1986)

- (7) How do you_i think [_s it went for yourself_i] ? (cf. (3b))

(In a conversation, M.T. Wescoat, Personal Communication)

- (8) He finds equally "remarkable that their_i critical diagnosis and prognosis should have so much in common among themselves_i and with the critics of the twentieth century." (cf. (4b))

(Brown Corpus)

- (9) a. John_i put the blanket under himself_i.
b. John_i put the blanket under him_i. (cf. (5))

(Kuno 1987)

(6)のように、一人称・二人称の再帰代名詞を含む文においては、しばしば①の条件が破られ、文中に同一指標を持つ先行詞がなくても容認される。(7)は②の条件を破っており、再帰代名詞が最小統率範疇である補文の中で束縛されていない。(8)においては、先行詞が所有格形でNPの中に含まれているため、③のc統御条件に従うことができない。(9)は、同じ構造のなかに再帰代名詞と代名詞の両方が現われる例であり、④の相補分布の条件を破っている。しかも、Kuno (1987)、Hintikka and Sandu (1991)によれば、(9a)は毛布とJohnとの身体的接触を含意するのに対し、(9b)においてはそのような含意はない。(すなわち、Johnが椅子に座っていて毛布が椅子の下にあるというような状況でもよい。)

束縛原理に従う例((1)–(5))と従わない例((6)–(9))を比較してみる

と、そこに共通点があることに気付く。束縛原理に従う例では、再帰代名詞が項の位置に生じている。これに対し、従わない例では、((9)を除いて)再帰代名詞が非項の位置に生じている。Pollard and Sag (1992) は先行詞の *coargument* である再帰代名詞のみが束縛原理 A に従うとしているが、これは正しい一般化であるように思われる。

3. Kuno (1987)

再帰代名詞の意味的な特性を考慮に入れた研究として、Kuno (1987) がある。Kuno は、英語の再帰代名詞の分布を決定する意味的制約として、次のようなものを挙げている。

- (10) 再帰代名詞は *empathy* 表現であり、その先行詞は *empathy* の焦点になりやすいものでなければならない。
- (11) 英語の再帰代名詞の指示物は、その文が表す行為あるいは心的状態の直接の受容者もしくは標的でなければならない。

(10) の制約は、(6)–(8) に当てはまるように思われる。特に (8) に関して言えば、*their critical diagnosis and prognosis* という NP は *inanimate* であり *empathy* の焦点にはなり得ず、*their* が先行詞となるという事実がうまく説明される。

(11) は、(9) のような例にみられる現象を説明するために Kuno が設けたものである。すなわち、再帰代名詞が用いられている (9a) においては、その指示物である John が「毛布をその下におく」という行為の直接の標的となるため、John と毛布の物理的接触が含意されるということになる。

上のような考え方は、再帰代名詞の持つ意味的側面をかなりの確にとらえていると思われるが、問題となる点もある。一つの点として、(10) は次のような文が非文法的であることを説明できない。

- (12) *His ambition hurt himself. (cf. (8))

His ambition は inanimate であり empathy の焦点になれないので、(10) は (8) の場合と同じように (12) でも his が先行詞となるという誤った予測をしてしまう。(8) と (12) を比較すると、(12) の再帰代名詞は項の位置にあり、ここでも Pollard and Sag (1992) の一般化が正しいことがわかる。

さらに、(11) は (9) のような現象を説明するために設けられたものであり、Kuno 自身が述べているように (10) の制約とは何の関連もないため、統一性に欠けるように思われる。

4. 再帰代名詞の意味的制約

この節では、束縛原理に従う再帰代名詞と束縛原理に従わない再帰代名詞の使用に関わる意味的な制約を提案する。

直観的に再帰代名詞の典型的用法と言えるのは、次の二つであろう。

(13) He_i himself_i seems to be tough, tireless, able, and intelligent, more intellectual and self-critical than most soldiers.

(Brown Corpus)

(14) She_i told_i herself_i rebelliously, and with pride, "I am an American."

(ibid.)

データは、上の直観が正しいことを示している。(Brown Corpus 中の再帰代名詞を含む例の内、(14) のタイプは約 51%、(13) のタイプは約 19% であった。) (13) のような例では、指示物がその人であって他の人ではないということを強調的に示すために再帰代名詞が用いられている。これに対し、(14) では Agent と Patient がともに同じ人物であると知覚されていることを示すために再帰代名詞が用いられている。SELF のこのような二つの用法は、一見無関係のように思われるが、歴史的にみると一方が他方から発展したものである。

(14) のタイプに関しては、Wilkins (1988) が効果的な分析をしている。

Wilkins によれば、再帰代名詞は先行詞と同じ thematic domain (θ 役割が与えられる領域) の中に生じ先行詞に自らの θ 役割を与えなければならない。²⁾

- (15) a. *Bill kicked himself.*
 b. *Bill, {Agent, Patient[^]}, kick_k,
 SELF, ϕ , kick_k. (Wilkins 1988)*

(15) において、*kick_k* は *kick* の thematic domain を表し、*Patient[^]* は元々は *himself* が持っていた θ 役割を表している。*Bill* は *himself* から θ 役割を渡されることによって一つの thematic domain の中で二つの θ 役割を持つことになる。しかし、このことは (13) のタイプの再帰代名詞には当てはまらない。なぜなら、(13) において *himself* は optional な同格名詞であり、 θ 役割を持つのは主語位置の *he* だからである。すなわち、Wilkins の分析が当てはまるのは、先行詞に渡すことのできる θ 役割を持つ、項の位置に生じる再帰代名詞ということになる。これは Pollard and Sag (1992) が一般化した束縛原理 A に従う再帰代名詞の、意味的な特性といえる。

では、(13) のタイプの再帰代名詞の意味的な特性は何であろうか。(13) において再帰代名詞は、指示物を強調的に示すために用いられている。SELF のこのような用法について OED には次のように述べられている。

In concord with a sb. or pron., to indicate emphatically that the reference is to the person or thing mentioned and not, or not merely, to some other.

すなわち、この用法の再帰代名詞は、指示物以外の存在 ((13) では他の兵士たち) を前提し、それに対して指示物を対照的に際立たせる役割を果たしている。*figure* と *ground* という概念を用いるならば、再帰代名詞は指示物を *figure* とするということになる。

以上のことから、小論では英語の再帰代名詞に関し次のような意味的制約

を提案する。

(16) 次のときにのみ、再帰代名詞を用いることができる。

- (i) その先行詞が一つの thematic domain の中で二つの θ 役割を持つ場合。
- (ii) その指示物が figure となる場合。

(16 i) は (14) のように動詞の目的語位置にある再帰代名詞に典型的に当てはまり、(16 ii) は (13) のような同格の再帰代名詞に典型的に当てはまる。すなわち、(16) は意味的な制約であるが、再帰代名詞の生じる統語的位置が (16 i) と (16 ii) のどちらが関わるかを決定するということになる。しかし、歴史的な観点からもわかるように、上の二つの用法は完全に二分割されるものではなく、その境界は連続的であると考えられる。このことを示すために、次のような項性の連続的なスケールを仮定する。

(17) Object of V > Argument PP > Adjunct PP > Appositive NP

(17) において動詞の目的語の項性を 10 とするならば、同格名詞は前述のように完全に optional で θ 役割を持たず項性は 0 である。また、Adjunct PP も optional であるが、次のような場合は θ 役割を仮定することは可能である。

- (18) a. He hid it under the table.
- b. He put it under the table.

(18a) の PP は (18b) の PP と同じく Location を持つと仮定できる。よってこれは同格名詞より項性があると考えられる。しかし、(18b) の PP とは異なり義務的ではないので、項性のスケールにおいて Argument PP よりは下位になる。(17) のスケールで、左端には (16 i) のみが働き、右に行く程 (16 i) の影響が弱くなって代わりに (16 ii) の影響が強くなり、右端では (16 ii) のみが働く。

(16) が束縛原理 A に従う例と従わない例をどのように説明するか見てみ

よう。(6) では、再帰代名詞が Adjunct PP の中に生じている。その指示物は話者であり、figure となっているといえるので、この文は容認される。一般的に言って話者・聴者は figure となりやすいので、項でない位置に一人称・二人称の再帰代名詞が先行詞なしで自由に生じることが (16) によって説明される。これに対し、三人称の再帰代名詞は、先行詞がないと指示物を同定できず、どれかわからないものを figure とすることはできないので、先行詞なしでは用いることができない。

(7) でも再帰代名詞は Adjunct PP に生じている。指示物が figure となっているので、この文も OK となる。これに対し、(3b) では再帰代名詞が動詞の目的語位置であり、(16 i) のみが適用され、先行詞が再帰代名詞と同じ thematic domain の中になく二つの θ 役割を持ってないので容認されない。

(8) と (12) の対照も (16) によって説明できる。(8) の再帰代名詞は Adjunct PP の中にあり、文脈において the critics of the twentieth century と対照的に際立たせられているので、(16 ii) によって認可される。一方、(12) において再帰代名詞は動詞の目的語位置であり、(16 i) によって排除される。

(9a) では、再帰代名詞は Argument PP にあり、(16 i) の適用により認可される。また、(16 ii) の影響により、指示物である John が figure となるので、毛布との物理的接触が含意される。すなわち (テレビ映像などである人物だけに焦点が当てられて浮かび上がる場合のように) John だけが周りの物理的環境に対して際立つことによって、間に何も他のものが介在しない毛布との関係が示されることになる。こうして、Kuno (1987) が (9) のような現象を説明するために設けた (11) の制約は不要になる。

以上のように、再帰代名詞の生起に対して提案した意味的制約 (16) は、束縛原理の対象となる再帰代名詞と対象とならない再帰代名詞をうまく説明できる。

(16) にとって問題となるように思われるのは、次のような、いわゆる

ECM 構文に生じる再帰代名詞であろう。

(19) He_i believes himself_i to be genius.

このような例に関しては、ad hoc ではあるが ECM 構文の再帰代名詞は主動詞の thematic domain に含まれるとしておく。ECM 構文の不定詞句の主語位置は、「例外的に」主動詞から目的格を与えられる位置であり、主動詞と近い関係にある。このことは、次のような例で不定詞句の主語と不定詞句の間に副詞句を挿入できることからわかる。

(20) I believed him until recently to be dead.

(M.T. Wescoat, Personal Communication)

これに対し、時制節の主語位置は格も主節の動詞とは無関係に与えられ、また主節の動詞の thematic domain から完全に外れている。

(21) *He_i believes that himself_i is genius.

また、ECM 構文の不定詞句が示す内容は、状態的なものが多い。以上のことから、ECM 構文の再帰代名詞が主動詞の thematic domain に含まれると規定しても問題はないように思われる。

5. 結 語

小論では、再帰代名詞を束縛原理に従うものと従わないものの二種類に分け、それらの分布を特徴づけている意味的な制約として、(16) を提案した。

(16) は現実のデータや歴史的な点を考慮に入れたものであり、かなり直観にあったものではないかと思われる。また、Kuno (1987) の意味的制約で別々に設けられていた (10) (11) を figure という概念を用いて一つにまとめ、より統一的な制約である。加えて、Kuno では説明できなかった (8) と (12) の容認性の差も説明することができる。

いうまでもなく、再帰代名詞を含む文には、様々の複雑な現象があり、一

般的な傾向を示した (16) がそのまま当てはまらない場合もあると思われる。(16) のさらなる精緻化が今後の課題である。

注

- 1) 小論では、いわゆる picture noun に生じる再帰代名詞は、今後の課題として直接の考察の対象から外した。
- 2) ここでの θ 役割とは、統語的なものではなく、人間が現実をどのように捕らえているかを反映したものである。したがって、 θ 規準などの統語的制約の対象とはならないと考えられる。

参考文献

- Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on Government and Binding*.
Dordrecht: Foris Publications.
- (1986) *Knowledge of Language*. New York: Praeger.
- Hintikka, Jaakko and Gabriel Sandu. (1991) *On the Methodology of Linguistics*. Oxford: Basil Blackwell.
- Kuno, Susumu. (1987) *Functional Syntax*. The University of Chicago Press.
- 中村捷、他 (1989) 『生成文法の基礎』 研究社。
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag. (1992) “Anaphors in English and the Scope of Binding Theory.” *Linguistic Inquiry*, Volume 23.
- Wilkins, Wendy. (1988) “Thematic Structure and Reflexivization.” *Syntax and Semantics*, Volume 21.

引用文献

- Conan Doyle, Sir Arthur. (1986) *Sherlock Holmes: the Complete Novels and Short Stories*. Volume 1. New York: Bantam.
- Francis, W.H. and H. Kucera eds. (1961) *A Standard Corpus of Present-Day Edited American English*. Providence: Brown University.